

「限界」のその先に

棚倉中学校 2年

大木 日菜乃(おおき ひなの)



「限界」。それは「これ以上は進めない、能力の向上ができない、ギリギリの境界線」。

世界一足が速いと言われる人物も、テナーより速く走ることはできません。それでも人は、「限界」を目指します。世界大会の記録が更新されるたびに、私たちは人類がまた一つ「限界」を超えたことを知ります。

また、人間がどれだけ対策を練ったとしても「想定外」が起こることがあります。東日本大震災で、あれだけの、「想定外」を経験した私たち。それでも人は、より安全なものを目指し、向上しようとしています。東日本大震災以降、防災に関する新しい技術が次々に開発され、私たちの生活の「限界」の境界線は、また少し広がっています。

人間の営みというのは、突き詰めるとこのように、「限界」をいかに超えていくかという大きなテーマにたどり着くのではないのでしょうか。では、人間が日々超えようとしてきた「限界」とはどのようなものなのでしょうか。

私は、学校の授業で美術の時間が大好きです。自分で絵を描くことも、名画と言われる作品を鑑賞することも好きです。絵を描く中でも特に人物を描くのが好きで、人体のバランスを考えてデッサンしたり、イラスト風にデフォルメして描いたり、様々な人物を描くのが楽しく、いつまでも没頭してしまいます。

そんな私が好きなのは、最も尊敬する作者であるレオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロの、人物をテーマにした作品です。現代には、近代アートなどの挑戦的な作品もあります。今までになかった手法を駆使して表現するという点で、近代アートもまた人間の「限界」に挑戦している作品だといえます。しかし私は、ダ・ヴィンチやミケランジェロが描き出す人物像にこそ、人間の「限界」への挑戦があるように感じるのです。彼らは、美を表現するためにありのままの人間の姿を探っていきます。ダ・ヴィンチは「画家は自然を師とするべし」という言葉を残し、あるがままに存在しているものを数学的にとらえて、より正確に人間を描き出そうとしました。あるがままの自然の姿をどれだけ追究できるかが、真の「美」や芸術であり、それが人類の超えようとする表現の「限界」なのではないかと思うのです。スポーツや芸術が動物や自然への挑戦であるように、芸術もまた、自然の美へ近づく挑戦を、そのテーマとしているのではないのでしょうか。

さて、このような「限界」を超えようとする人間の営みに必要な物とは何なのでしょう。

私はホッケー部に所属しています。棚倉中は県内でホッケー部がある唯一の学校なので、大会などで県外に行く機会が多く、そこで多くの強豪校と言われるチームを目にしてきました。強いチームに共通しているのは、高い技術力だけではありません。もう限界だと思えるときに、あと少し走り切れるか、限界を超えようとする意志の強さがあるか、がそのチームの強さを決めているように思います。

「もうダメかもしれない」という恐怖心を持ったとき、人は限界を超えられなくなるのではないのでしょうか。ダ・ヴィンチもミケランジェロも、記録を更新したスポーツ選手も、簡単に「限界」を超えてきたわけではないと思います。この先に、今までの自分を超越する何かがあるのではないか。そのかすかな光を求めた地道な挑戦こそが、人間に「限界」の先を見せてくれるのではないのでしょうか。

私はまだ、人類の「限界」に挑戦するような大それたことはできないけれど、自分の「限界」を超えていくことはできると思います。「限界」のその先へ、まだ見ぬ未来へ向かって力強く進んでいきたいと思いません。